



Title	文久二年の官船第一次上 派遣と文久三年 元治元年の第二次上 派遣に関する史料に就て
Author(s)	武藤, 長蔵
Citation	商業と経済, 5(2), pp.164-169; 1925
Issue Date	1925-02-01
URL	http://hdl.handle.net/10069/26820
Right	

This document is downloaded at: 2019-02-23T11:10:20Z

文久二年の官船第一次上海派遣と文久三年の元

治元年の第二次上海派遣に關する史料に就て

教授 武藤長藏

大正十一年三月發行我長崎高等商業學校研究館年報『商業と經濟』第二冊所載故川島教授稿『開國以後最初の上海貿易』は當時我校學生たりし卒業生飯田信一君が故川島教授に提供したる唐國渡海日録其他合せて十三冊の史料に基き文久二年（西歷千八百六十二年）長崎より上海へ貿易船千歲丸（英人 Captain Richardson 所有 British barque 'Armistice'）なる汽船を幕府が買收し船名を改めしもの）を幕府が派遣せし事に就て考證されたものである。

其後程もなく川島教授は俄に病を得て長崎聖福寺畔の寓居に永眠された。而して飯田信一君の嚴君飯田七三郎氏の所就された前述の唐國渡海日録其他の史料は私より御願して我校に御寄贈を得た。而して飯田七三郎氏の嚴君が松田屋伴吉氏で上海行に加はりた人である。而して飯田七三郎氏の嚴君が松田屋伴吉氏で此唐國海日記其他の手録を遺した人である。この松田屋伴吉氏は明治十三年十月二十三日に永眠されたとの事であるから上海に行かれたのは三十一歳の

時であつた。さて川島教授は右長崎の松田屋伴吉の唐國渡海日記以下の手録の外に我國の側では的確なる史料が見當らなかつた如く書いて居らるゝが其後古賀二郎君が大正十二年六月發行大阪朝日新聞長崎販賣所出版部發行日華聯絡記念『長崎と上海』に寄稿した『文久二年徳川幕府が初て官有商船千歳丸を長崎より上海へ渡航せしめた英舉に就いて』と題する考證文に於て又大正十二年五月八日以降の長崎新聞に掲載した『六十年前に於ける上海への出貿易』と題する同一種の文に於て述べた如く他に高杉晋作、中牟田倉之助等千歳丸にて上海に渡航した人の書留めた記録又故田邊太一氏著『幕末外交談』中にも其記事の存する事は川島氏の氣のつかざりし事と思はれる。シカシ古賀君も川島君の考證を私より聽き其文を讀みそれに刺激せられて右大阪朝日新聞長崎販賣所發行の冊子及び長崎新聞に寄せたる考證文を草したものであるとすれば川島君の功も忘れてはならぬ。又川島君の考證の足らざる處を補ふのは我等の故人に對する親切でもあり又學問の爲めでもある。

今茲に私は川島教授が注意せざりし高杉晋作及中牟田倉之助兩氏の記事又田邊太一氏の談る處の内容を詳に紹介せむとするものではない、たゞ主として參考書を左に示し置くにとゞめる。(第一)に故東行高杉晋作は文久二年壬戌長州藩主より支那の形勢事情等視察の爲め支那行を命ぜられ江戸を發し長崎に到り幕吏に陪從し千歳丸に搭じて支那上海港に渡り其聞見する所

を筆録して一冊子と爲し遊清五録と總稱した其内容は航海日録、上海掩録、外情探索録、内情探索録、崎陽雜錄是である。これ等亦一資料である。大正五年東京民友社發行東行先生略傳に收録されて居る。

(第二)に佐賀藩の命をうけて千歳丸に乘組みて上海に赴いた中牟田倉之助(後年の海軍中將子爵中牟田倉之助氏)も亦其『航海日記』『上海行日記』『上海滞在雜録』なる原稿あり、それを引用して草したるものは即ち文學士中村孝也氏稿『中牟田倉之助傳』第十三上海渡航である。

(第三)に故田邊太一氏著『幕末外交談』に◎海外貿易の首途と題する部分に曰く

長崎奉行服部左衛門佐より、建議する所あり、勘定奉行小栗上野介これを内に翼けて海外貿易を一試せむとの舉あり、予は嚴譴を蒙りて外人との交通を斷れたる折柄なれば、深くも其事を聞知せず然れども此時にして此舉ある、實に意量の外に出るものなれば今其書類の存するものあらば其顛末を詳にして論史者に問はんを試みしもこれを得る能はず當時此役に與りし人物も多くは死亡し中に存するものもあるも遠く静岡の地方に在り就て問ふべきの便なければ僅々其聞く所を陳べて猶考察する所あらんを、當時幕府の目的は清國と通信通商の條約を結ばんにありて先その下懸合をなし且上海邊貿易の景況を視察せしめんとのことなり故を以て重立たる役人を出遣せしにはあらず、長崎廳吏調役並沼間平六郎、これが主となり勘定役根立助七郎徒目付錫田三郎右衛門等これに參せり、英國商船を買揚げ千秋丸(千歳丸の誤)と改號しこれに貨物を搭じて上海に至りこれを賣さばき時の道臺吳照に應接して立歸りたり。而して此事一に長崎に駐在せし芬蘭コンシユルホートインの周旋によれるとのよし丈けばたしかに聞く所なり。

(第四) に外國側の参考記事として川島氏が一言して居らるゝモスマン (Samuel Mossmann) 氏著 New Japan 中の短き記事は川島君の考證文には少しも其記事の内容を示してないから、作序左にそれを示して置く。曰く

While the Government officials at Yokohama were thus exhibiting their hostility to all foreign institutions, a most unexpected transaction occurred at Nagasaki, showing their appreciation of our shipping and commerce. At that port the British barque 'Armistice', 385 tons, captain Richardson, commander and owner, traded regularly to and from Shanghai, with cargoes of native produce and foreign merchandise, which yielded highly profitable returns. She was in every way a smart craft, kept in excellent trim aloof and aloft, with unusually good capacity for freight.

The officials frequently boarded her, expressing their desire to know all about her traffic, which the captain unhesitatingly complied with. One day he was asked if he would sell the vessel, when he replied he had no objection to do so if he got a fair price. After some consideration, and exhibiting his traffic ledger, he asked thirty-four thousand dollars, which they agreed to pay.

The bargain was soon closed, the vessel handed over, and renamed the 'Sen-zai-maroo', signifying "to last a thousand years"—a class of vessel which is not to be found on Lloyd's register.

She was loaded with Japanese produce, and manned by Japanese sailors, having several officials on board, and made a safe trip to Shanghai. It was intended that this should be the nucleolus of a merchant fleet under Government control, so as to compete with foreign merchantmen; but it did not succeed, and the project was ultimately given up.

(Samuel Mossmann : New Japan, the Land of the Rising Sun, Chap. X. § 181. Japanese Government purchased a British merchantman. pp. 144-145.)

右モスマンの外に川島君は注意せなかつたが古賀君は North China Herald 中より Senzai-marū に關する記事を引用して居る (大阪朝日新聞長崎販賣所發行日華聯絡記念「長崎と上海」參

照)又古賀君は Henri Cordier 著 *Histoire des Relations de la Chine avec les Puissances Occidentales* にも其記事なきを遺憾とする事を述べて居る。又古賀君は參考して居らぬが私が先年上海旅行の際學校の爲めに求め歸つた故 G. Lanning 氏及故 S. Couling 氏共編上海史 (*The History of Shanghai*) 第一冊 (Part I.) にも此千歲丸 (*Senzai-maru*) の記事はない但しこの書には舊き上海黃浦江岸の油繪を口繪として掲げて居るのは面白い (大阪朝日新聞長崎販賣部發行『長崎と上海』所載拙稿參照)。

さて右文久二年 (清朝同治元年西曆千八百六十二年) 長崎より上海へ貿易船の派遣に次で其翌年即ち文久三年 (同治二年西曆千八百六十三年) 十月命を下して幕府が更に軍艦奉行支配格にして箱館奉行支配調査並たる山口舉直等を上海に派遣する事とし一行は同年十一月十一日に品川を出帆し翌元治元年 (同治三年西曆千八百六十四年) 二月九日兵庫を發し長崎には風浪のため寄航を廢して上海に直航し同月二十一日 (陽曆三月二十八日) 上海に着し歸途は長崎に寄り兵庫を経由して品川に同年七月十日歸着した其幕吏の視察復命書とも稱すべき所謂黃浦誌と題する一冊子を往年新村博士は在東京上野の帝國圖書館の藏書中に見出し謄寫し置かれしを大正十二年長崎再遊 (同博士近著南蠻更紗に收録されたる『長崎再遊』と題する會て雜誌『心の花』に寄せられし紀行文參照) の折携へ來りて私に示されたものを借受け我研究館年報『商業と經濟』に載

する承諾を得本誌前號に載する筈であつたが新村博士の緒言の寄稿前號原稿へ切に遅れし故約一ヶ年後漸く本誌に掲載さるゝ事となつた。

茲に掲ぐる『元治元年に於る幕吏の上海視察記』なる題名は便宜上新村博士が新に附せられし名前であつて原本には黄浦誌と題されて居る事は前述の通である。黄浦誌とは上海舊城市及外國居留地の前面を流るゝ黄浦江 (The Hwangpoo River) の名をとりたるものである。

私は今新村博士の示された原本の謄寫本を更に複寫しそれに簡略なる脚註と本文中に附記を試み解釋に多少の便利を與へむとしたのであるが業半にして原稿をへ切印刷に廻す必要に迫られたのでそは新村博士と同様に私も亦之を他日に期する事とした。切に讀者の諒察を希ふ次第である。